

妖僧記

泉鏡花

青空文庫

加賀の国黒壁くろかべは、金沢市の郊外一里程りていの処にあり、魔境を以もつて国中こくちゆうに鳴る。蓋し野田山のだやまの奥、深林幽暗の地たるに因れり。ここに摩利支天を安置し、これに冊かしずく山伏の住すまえる寺院を中心とせる、一落いちらくの山廓さんかくあり。戸数は三十有余にて、住民殆ど四五十なるが、いずれも俗塵ぞくじんを厭いといて遯世とんせいしたるが集りて、悠悠閑日月を送るなり。

されば夜よとなく、昼となく、笛、太鼓、鼓などの、舞まい囃子ばやしの音ねに和かして、謡うたいの声起り、深更時ならぬに琴、琵琶びわなど響ひび微すすかに、

金沢の寝耳に達する事あり。

ひととせ

一歳初夏の頃より、このあたりを徘徊せる、世にも忌わし

こじきそう

き乞食僧あり、その何処より来りしやを知らず、忽然黒壁に

あらわ

住める人の眼界に顕れしが、殆ど湿地に蛆を生ずる如く、自然に

湧き出でたるやの觀ありき。乞食僧はその年紀三十四五なるべし。

ずたずた

寸々に裂けたる鼠の法衣を結び合せ、繋ぎ懸けて、辛うじてこ

まと

れを絡えり。

ようぼう

容貌甚だ憔悴し、全身黒み痩せて、爪長く髯短し、ただ

しやうすい

これのみならむには、一般乞食と変わらざれども、一度その鼻

こつじき

を見る時は、誰人といえども、造化の奇を弄するも、また甚だ

たれひと

しきに、驚かざるを得ざるなり。鼻は大にして高く、しかも幅広

に膨れたり。その尖は少しく曲み、赤く色着きて艶あり。鼻の筋通りたれば、額より口の辺まで、顔は一面の鼻にして、瘦せたる頬は無きが如く、もし掌を以て鼻を蔽えば、乞食僧の顔は隠れ去るなり。人ありて遠くより渠を望む時は、鼻が杖を突きて歩むが如し。

乞食僧は一条の杖を手にして、しばらくもこれを放つことなし。杖は※状の自然木なるが、その曲りたる処に鼻を凭たせつ、手は後うしろさま様に骨盤の辺あたりに組み合せて、所作なき時は立ちながら憩いぬ。要するに吾人が腰掛けて憩うが如く、乞食僧にありては、杖が鼻の椅子いすなりけり。

奇絶なる鼻の持主は、乞丐きつがいの徒には相違なきも、強ち人の憐れ

んみん
愍を乞わず、かつて米錢の惠与を強いしことなし。喜捨する者
あれば鷹揚おうように請取ること、あたかも上人が檀越だんえつの布施を納む
るが如き勿体もったい振りなり。

人もしその倨傲きよごうなるを憎みて、些さの米錢を与えざらむか、乞
食僧は敢あえて意となさず、決してまた餓うえむともせず。

この黒壁には、夏候かこう一疋びきの蚊もなしと誇るまでに、蝦蟇がまの多き
処なるが、乞食僧は巧たくみにこれを漁あさりて引裂き啖くちうに、約おおむね一いつ夕せき
十数疋を以て足れりとせり。

されば乞食僧は、昼間何処いずくにか潜伏して、絶えて人に見えず、
黄昏こうこん蝦蟇がまの這出はいづる頃を期して、飄ひよう然ぜんと出現し、ここの軒
下、かしこの塀際、垣根あたりの薄暗うすくら闇やみに隠見しつつ、腹みに充

たして後はまた何処いずかたへか消え去るなり。

二

ここに醜怪なる蝦蟇がまほうし法師と正反對して、玲瓏れいろう玉を欺く妙齡の美人ありて、黒壁に住居すまいせり。渠かれは清川お通とて、親も兄弟もあらぬひとりみ独身なるが、家と同じくする者とは、わずかに一人にんの老嫗うなあるのみ、これその婢ひなり。

お通は清川何某なにがしとて、五百石を領せし旧藩士の娘なるが、幼にして父を失い、去々おとし年また母を失い、全く孤独の身とはなり果てつ、知れる人の嫁入れ、婿娶とれと要らざる世話を懊惱うるさく思いて、

母の一周忌の終るとともに金沢の家を引払い、去年よりここに移りたるなり。もとより巨額の公債を有し、衣食に事欠かざれば、花車風流に日を送りて、何の不足もあらざる身なるに、月の如くその顔は一片の雲に蔽われて晴ることなし。これ母親の死を悲み別離に泣きし涙の今なお 双頬に懸れるを光陰の手も拭い去るあたわざるなりけり。

読書、弹琴、月雪花、それらのものは一つとして憂愁を癒すに足らず、転た懐旧の媒となりぬ。ただ野田山の墳墓を掃いて、母上と呼びながら土に縋りて泣き伏すをば、此上無き娯楽として、お通は日課の如く参詣せり。

七月の十五日は殊に魂祭の当日なれば、夕涼より家を

出でて独り彼処かしこに赴きけり。

野田山に墓は多けれど詣もうでく来る者いと少なく墓守もる法師もあらざれば、雑草生おしげ茂りて卒塔婆そとば倒れ断塚だんちようかいふん壊墳算ふんさんを乱して、満目うた転た荒涼たり。

いつも変らぬことながら、お通は追懐の涙をそそ灌ぎ、花を手向けて香をくん燻じ、いますぐ如く斉眉かしずきて一時いつときあまり余も物語りて、帰宅の道は暗うなりぬ。

急いそぎあし足に黒壁さして立戻る、十間けんばかり間あいを置きて、背後うしろよりぬき足さし足ひそか、密に歩を運ぶはかの乞食僧なり。渠かれがお通のあとを追うは殆どほとん旬日じゆんじつぜん前まへよりにして、美人が外出をなすに逢あうては、影の形に添う如く絶えずそこつきまとこ附絡うを、お通は知ら

ねど見たる者あり。この夕もまた美人をその家まで送り届けし後、杉の根の外おもてたらずに佇みて、例の如く鼻に杖つえをつきて休らいたり。

時に一縷いちるの暗香あんこうありて、垣の内より洩もれけるにぞ法師は鼻を

蠢うごめかして、密に裡うちを差覗さしのぞけば、美人は行水を使いしやらむ、

浴衣涼しく引絡ひきまとい、人目のあらぬ処まきおびすがたなれば、巻帯姿まきおびすがた繕つわで

端居はしいしたる、胸のあたりの真白まじきに腰くれないの紅照添まばゆいて、眩まばゆきばかり

美うるわしきを、蝦蟇法師とみこうみは左瞻右視あるい、或は手ふを掉つり、足つまだを爪立つまだて、

操人形みぶりが動くが如き奇異なる身振みぶりをしたりとせよ、何思くびすいけむ踵くびす

を返し、更に迂回うかいして柴折戸しおりどのある方かたに行き、言葉ゆより先に笑懸くびす

けて、「暖ぜんき飯一膳ぜん与ぜんえたまえ、」と巨おおいなる鼻にわさきを庭前にわさきへ差出くびす

ぬ。

未だ^{いま}乞食僧を知らざる者の、かかる時不意にこの鼻に出会いな
 ば少なくとも絶叫すべし、美人はすでに渠^{かれ}を知れり。且つその狂
 か、痴^ちか、いずれ常識無き阿房^{あほう}なるを聞きたれば、驚ける気色も
 無くて、行水に乱^{みだれびん}鬢の毛を鏡に對して撫^{なでつ}附けいたりけり。

蝦蟇法師はためつすがめつ、さも審^{いぶ}かしげに鼻を傾けお通が為^な
 せる業^{わざ}を視^{なが}めたるが、おかしげなる声を発し、「それは」と美人
 の手にしたる鏡を指して尋ねたり。妙なることを聞く者よとお通
 はわずかに見返りて、「鏡」とばかり答えたり。阿房はなおも推^お
 返^{しかえ}して、「何^{なん}の用にするぞ」と問いぬ。「姿を映して見るもの
 なり、御僧^{おんそう}も鼻を映して見たまえかし。」といいさま鏡を差向
 けつ。蝦蟇法師は飛^{とびすさ}退りて、さも恐れたる風情にて鼻を飛ばし

て遁去りける。にげさ

これを語り次ぎ伝え聞きて黒壁の人々は明かに蝦蟇法師の価値を解したり。なお且つ、渠等かれらは乞食僧のお通に対して馬鹿々々しき思いを運ぶを知りたれば、いよいよその阿房なることを確めぬ。さりながら鏡を示されし時乞食僧は逃げ去りつつ人知れず左記の数言を呟つぶやきたり。

「予は自ら誓えり、世を終るまで鏡を見じと、然り断じて鏡を見まじ。否これを見ざるのみならず、今思おもいいだ出したる鏡ものという品の名さえ、務めて忘れねばならぬなり。」

蝦蟇法師がまほうしがお通おうなに意あるが如そぶりき素振そぶりを認めたる連中は、これを

お通おうなが召使めいしの老嫗らうなに語りて、且たわぶつ戯たわぶれ、且たわぶつ戒たわぶめぬ。

毎夕すずみだい納涼台なつやだいに集やからる輩ちようちようは、喋ちようちよう々ちようちようしく蝦蟇法師うわさの噂うわさをなして、

何者なにものにまれ乞食僧きじきそうの昼間ひるまの住家すまを探り出だして、その来歴らいれきを発みいだ出だ

さむ者さむものには、賭物かけものとして金きん一円いちげんを抛なげうたむと言いいあえりき、一いっせ

夕きお通おうなは例れいの如ごとく野田山のたさんに墓参ぼさんして、家いへに帰かへれば日ひは暮くれつ。

火ひを点たじて後のち、窓まどを展ひらきて屋外いへの蓮池れんちを背せにし、涼すずを取りつつ机き

に向むかいて、亡なき母ははの供養くやうのために法華経ほけきやうぞ写かしたる。その傍かたわらに

老嫗らうなありて、頻しきりに針はりを運はばせつ。時ときにかの蝦蟇法師がまほうしは、どこを徘徊はい

徊いしたりけむ、ふと今いまここにきた来きれるが、早はやくもお通おうなの姿すがたを見て、

まなこ

眼を細め舌なめずりし、恍惚たるもの久しかりし、乞食僧は美人臭しとでも思えるやらむ、むくむく鼻を蠢かし漸次に顔を近附けたる、面が格子を覗くとともに、鼻は遠慮なく内へ入りて、お通の頬を掠めむとせり。

ちんかく
珍客

珍客に驚きて、お通はあれと身を退きしが、事の余りに滑

稽なるにぞ、老婆も叱言いう違なく、同時に吻々と吹き出しける。

あやま
蝦蟇法師は悞りて、歡心を購入えりとや思いけむ、悦氣満面に満

ち溢れて、うな、うな、と笑いつつ、頻りにものを言い懸けたり。

いみきら
お通はかねて忌嫌える鼻がものいうことなれば、冷然として

見も返らず。老媪は更に取合ねど、鼻はなおもずうずうしく、役

にも立たぬことばかり句切もなさで饒舌散らす。その懊惱さうらさに堪えざれば、手を以て去れと命ずれど、いつかな鼻は引込まひっこまさぬより、老媪はじれてやつきとなり、手にしたる針の尖を鼻の天窗あたまに突立てぬ。

あわれ乞食僧は留とどめを刺されて、「痛し。」と身体からだを反そりかえ返り、涎よだれをなすりて逸物いちもつを撫廻なでまわし撫廻し、ほうほうの体ていにて遁出にげいだしつ。走り去ること一町ばかり、俄然留がぜんどまり振返り、蓮池を一つ隔てたる、燈火ともしびの影を屹きつと見し、眼の色はただならで、怨毒えんどくを以て満たされたり。その時乞食僧は杖つえを掉上ふりあげ、「手段のいかんをさえ問わざれば何の望のぞみか達せざらむ。」

かくは断乎だんことして言放ち、大地をひしと打敲うちたたきつ、首を縮め、

杖をつき、徐ろに歩を回らしける。

その背後より拔足差足、密に後をつけて行く一人の老嫗あり。これかのお通の召使が、未だ何人も知り得ざる蝦蟇法師の居所を探りて、納涼台が賭物したる、若干の金子を得むと、お通の制むるをも肯かざして、そこに追及したりしなり。呼吸を殺して従い行くに、阿房はさりとも知らざる状にて、殆ど足を曳摺る如く杖に縋りて歩行み行けり。

人里を出離れつ。北の方角に進むことおよそ二町ばかりにて、山尽きて、谷となる。ここ嶮峻なる絶壁にて、勾配の急なることあたかも一帯の壁に似たり、松杉を以て点綴せる山間の谷なれば、緑樹長に陰をなして、草木が漆黒の色を呈するより、

黒壁とは名附くるにて、この半腹の洞穴どうけつにこそかの摩利支天は
 祀まつられたれ。

遙はるかに瞰みおろ下す幽谷は、白日闇はくじつあんの別境にて、夜昼なしに靄もやを籠こ
 め、脚下に雨のそぼ降る如く、溪流暗に魔言を説きて、啾しゅう々しゅう
 たる鬼気人を襲う、その物凄ものすごさ謂いわむ方なし。

まさかこことは想わざりし、老媪は恐怖の念に堪えず、魍魎ちみもう
 魍魎りよう隊をなして、前途ふさがに塞るとも覺しきに、慾よくにも一歩を移し
 得で、あわれ立たちすくみ竦すくになりける時、二点の蛍光こなた此方を見向き、
 一喝して、「何者ぞ。」掉冠ふりかむれる蝦蟇法師の杖もとの下に老媪は阿あ
 呀わやと蹲うずくま踞まりぬ。

蝦蟇法師は流眇しりめに懸け、「へ、へ、へ、うむ正こやつに此奴なり、予

が顔を傷附けたる、大胆者、しかえし 讐返しということのあるを知らずして「傲然ごうぜんとしてせせら笑う。

これを聞くより老媪はぞつと心臓まで寒くなりて、全体氷柱つららに化したる如く、いと哀れなる声を発して、「命ばかりはお助けあれ。」とがたがた震えていたりける。

四

さるほどに蝦蟇法師がまほうしはあくまで老媪おうなの胆きもを奪いて、「コヤ老媪なんじ、汝の主婦を媒妁なかだちして我わが執念を晴らさせよ。もし犠牲いけにえを捧げざれば、お通はもとより汝もあまり好きよことはなかるべきなり、忘

れてもとりもつべし。それまで命を預け置かむ、いのちみようが 命冥加な老
いぼれ 耆めが。「と荒らかに言棄てて、疾風土を捲いて起ると覺しく、
 恐る恐る首を擡げあぐれば、蝦蟇法師は身を以て隕すが如く下り
ことうべもた 行き、もや 靄に隠れて失せたりけり。
う

やれやれ生命いのちを拾いたり、真蒼まつさおになりて遁歸にげかえれば、冷た
 くなれる納すずみだい台にまだ二三人居残りたるが、老媪の姿を見るよ
 りも、「探検し来りしよな、蝦蟇法師の住居すまいは何処いずこ。」と右左よ
 り争い問われて、答うる声も震えながら、「何がなし一件じや、
 これなりこれなり。」と、握にぎりこぶし拳を鼻の上にぞ重かさねたる、乞食僧
 の人物や、これを痴ちと言いわむよりはたまた狂と言いわむより、もつとも
 魔たるに適するなり。もししからずば少なくとも魔法使に適する

なり。

かかりし後法師の鼻は甚だ威勢あるものとなりて、暗裡あんり人をし
て恐れしめ、自然黒壁を支配せり。こは一般に老若ろうにやくが太く魔
僧を忌憚いみはばかかり、敬して遠ざからむと勤めしよりなり、誰か妖
星うせいの天に帰して、眼界を去らむことを望まざるべき。

ここに最もそのしからむことを望む者は、蝦蟇と、清川お通と
なり。いかんとなればあまたの人の嫌悪に堪えざる乞食僧の、黒
壁に出没するは、蝦蟇とお通のあるためなりと納涼台すずみだいにて語り
合えるを美人はふと聞嘯ききかじりしことあればなり、思うてここに到
る毎ごとに、お通は執心の恐しさに、「母上、母上」と亡母を念じて、
己おのが身辺に絡纏まつわりつつある淫魔いんまを却しりぞけられむことを哀願しき。お

通の心は世に亡き母の今もその身とともに在おわして、幼少のみぎりにおけるが如くその心願を母に請えば、必ず肯きかるべしと信ずるなり。

さりながらいかにもせむ、お通は遂つひに乞食僧の犠牲にならざるべからざる由老媪の口より宣告されぬ。

前日、黒壁に賁ふんりん臨りんせる蝦蟇法師への貢みつぎとして、この美人を捧げざれば、到底好よき事はあらざるべしと、恫どう怵かつ的に乞食僧より、最も渠かれを信仰してその魔法使たるを疑わざる件くだんの老媪に媒なか妁だちすべく言込みしを、老媪もお通に言出しかねて一日免いちじつれに猶た予めらしが、厳しく乞食僧に催促されて、謂いわで果つべきことならねば、止むことを得で取次たるなり。しかるにお通は予あらかじめその趣を心得

たれば、老媪が推測りしほどには驚かざりき。

美人は冷然として老媪を諭しぬ、「母上の世に在いまさば何とこれを裁きたまわむ、まずそれを思い見よ、必ずかかる乞食の妻となれとはいいたまわじ。」と謂われて返さむ言ことばも無けれど、老媪は甚だしき迷信者じやなれば乞食僧の恐喝きやうかつを真まこととするにぞ、生命いのちに關わる大事と思ひて、「彼奴かやつは神通じんずうこうだい大なる魔法使にて候えば、何を仕出しいださむも料はかり難がたし。さりとして鼻に従いたまえと私わたくし申上げはなさねども、よき御分別もおわさぬか。」と熱心に云えば冷ひやかに、「いや、分別も何もなし、たといいかなることありとも、母上の御みこころ心に合あわぬ事は誓つてせまじ。」

と手強き謝絶に取附く島なく、老媪は太いたく困こうじ果てしが、何思

いけむ小^こ膝^{ひざ}を拍^うち、「すべて一心^{かた}固^{たま}りたるほど、強く恐^{おそ}しき者は
 なきが、鼻^{はな}が難^{がた}題^{だい}を免^{まぬ}れむには、こつちよりもそれ相当^{たうとう}の難^{がた}題^{だい}を
 吹^ふ込^こみて、これだけのことをしさえすれば、それだけの望^{のぞ}みに応^{こた}ず
 べしとこ^こうい^いう風^{ふう}に談^{だん}ずるが第^い一^ち手^て段^{だん}に候^あり、昔^{むかし}語^{がたり}にさる
 こと侍^{はべ}りき、こ^ここに一^{ひと}条^{すじ}の蛇^{くちなわ}ありて、とある武^{もの}士^{のふ}の妻^のに懸^け想^{そう}
 なし、頑^{かたくな}にしよ^うじ着^きて離^{はな}るべくもなかりしを、その夫^な何^が某^し
 智^ち慧^えある人^{ひと}にて、欺^{あざ}きて蛇^{へび}に約^{やく}し、汝^{なんじ}巨^お鷲^{わし}の頭^{あたま}三^{みつ}個^こを得^えて、そ
 れを我^{われ}に渡^{わた}しなば、妻^{つま}をやらむとこたえしに、蛇^{へび}はこれ^{これ}を諾^{うべ}いて
 驚^{おど}と戦^{いくさ}い亡^{ほろ}び失^びせしとい^いうこと^{こと}の候^あり。されど今^{いま}愁^{しう}に驚^{おど}の首^{くび}な
 どと謂^いう時^{とき}は、か^かの恐^{おそ}しき魔^ま法^{ぽう}使^しの整^{ととの}え来^きぬとも料^{はか}り難^{がた}く因^よりて
 婆^ば々^ばが思^し案^{あん}には、(其^そ方^{なた}の言^{こと}分^{ぶん}承^{じやう}知^ちしたれど、親^{おや}の許^{ゆる}のなく^{なく}ては

ならず、母上だに引承^{ひきうけ}たまわば何時^{なんどき}にても妻とならん、去つてまず母上に請^{こいきた}来れ」と、かように貴娘^{あなた}が仰せられし、と私^{わたくし}より申さむか、何がさて母君は疾^{とく}に世に亡き御方^{おんかた}なれば、出来ぬ相談と申すもの、とても出来ない相談の出来よう筈^{はず}のなきことゆえ、いかなる鼻もこれには弱りて、しまいに泣寝入となるは必^{ひつじ}定^{よう}、十二御心配なされますな、」と説く処^{もつとも}の道理なるに、お通もうかと領^{うなず}きぬ。かくて老嫗がこのよしを蝦蟇法師に伝えて後、鼻は黒壁に見えずなれり。

さては旨^{うま}いぞシテ操^やつたり、とお通にはもとより納涼台^{すずみだい}にも老嫗は智慧を誇りけるが、奚^{いづく}ぞ知らむ黒壁に消えし蝦蟇法師の、野田山の墓地に顕^{あらわ}れて、お通が母の墳墓の前に結跏趺坐^{けつかふざ}してあら

むとは。

その夕ゆうもまたそこに詣もでし、お通は一目見て蒼あおくなりぬ。

明治三十五（一九〇二）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第七卷」岩波書店

1942（昭和17）年7月22日第1刷発行

※疑問点の確認に当たっては、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妖僧記

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>